

# 女性が犯罪に抱く恐怖についての社会地理

ラッチェル・H・ペイン\*  
(吉田 容子\*\* 訳)

Rachel H. PAIN  
Social geographies of women's fear of crime  
*Transaction. Institute of British Geographers. NS.*, 22, 1997, pp. 231-244.  
© 1998 The Institute of British Geographers

犯罪への恐怖を地図化するような伝統的アプローチは、ジェンダーの不平等を反映したものとして、性的・身体的暴力による影響を記述したり、説明することに限られている。近年の研究から経験的な実証を援用して、女性の恐怖についての社会地理が発展した。そこでは、都市の空間利用に対して制約が課せられていること、危険の認知に関する公的空間と私的空間の違い、「安全な」場所と「危険な」場所へと空間が社会的に構築されること、女性空間に対する社会統制、という地理的分析の4つの重要な領域が注目されている。この枠組みの中で、社会階層、年齢、身体的障害、母であること、といった女性の属性が彼女たちの暴力的犯罪の体験やそれへの恐怖の反応を規定する様式が示される。

キーワード：暴力的犯罪への恐怖、性的暴力、都市空間、空間の制約、社会統制

## はじめに

1980年代から、FOVC (fear of violent crime 女性が暴力的犯罪に抱く不安) についての関心が研究者やメディア、政策立案者の中で強くなってきた。FOVCの社会的差異による関係——例えば、高齢者 (Mawby 1988; Midwinter 1990)、子ども (Anderson et al. 1990; Goodey 1994)、少数民族グループ (Webster 1994) ——がますます理解されるようになってきたものの、ジェンダーは依然として社会的差異を生み出す強力な決定要因である (Smith 1989)。最近では、男性が感じる不安について、その意向や意味に研究者は注目するようになった (Stanko and Hobdell 1993) が、FOVCによって生じる問題や制約が女性にとって相当大きなインパクトになっていることは、疑う余地もない (Gordon and Riger 1989; Pain 1991; Stanko 1987; Warr

1984)。犯罪に対する恐怖は、西洋の都市で社会的・政治的関心事となっており、女性が男性の暴力に抱く恐怖は、その程度や種類の見地から問題の中心となっている (Pain, 1993b)。

犯罪学者によってなされた初期の研究に異議申し立てをしながら、地理学者は女性の FOVC の理解に重要な貢献を行ってきた。地理学者の理解においては、調査から明らかになったジェンダーの差異は空間的にも当然政治的にも注目されるべきものであって、その差異は女性にとっての実際の危険度、男性からの暴力や侵害の認知、社会における女性の従属的な地位といったものに起因している (Pain 1991) のだが、これまでの研究では、むしろ女性の肉体的な弱さの結果として、ジェンダーの差異を理解する傾向があった (Hough and Mayhew 1983)。Valentine (1989) は、女性の FOVC が空間的に広がっていることをはじめて強調し、これを英国都市レディングで女性研究におけるジェンダーの不平等と関連づけて説明した。その研究では、女性

\* ノーサンブリア大学 \*\* 摂南大学

の役割についての伝統的概念や女性が利用するのに適切と考えられる「場所」を再生産しながら、公的な場所に対する執拗なまでの恐怖やその結果として女性が採る防衛手段が「家父長制の空間的表現」を生み出していることが、彼女によって明らかになった。公的空間と同様に、私的空間のイデオロギーやイメージ（家庭は女性に対する暴力がもっとも起こりやすい場所であるから）も、以下の方法にとって重要となっている。

家族のイデオロギーや都市空間の性別分業が、公的空間では女性は安全ではないという絶対的な認識を創造しているし、家族の構成単位の中のあらゆる男性のうちから、一人の男性の保護を必要としている。

(Valentine 1992, p. 27)

## 1. 方法

本稿は、イギリスの都市での女性の FOVC に関する初の包括的研究である。本研究では、女性が抱く恐怖について、その空間パターンを探究することや、他の社会的アイデンティティがいかに恐怖の程度や影響をもたらすのかを検証することをねらいとしている。研究にあたり、二つの方法を採用した。典型的な事例を調査するために、費用的にも時間的にも効率のよい方法として、匿名性やプライバシーを考慮しつつ自己記入式の郵送アンケート調査を採用した。600 枚のアンケート用紙をエディンバラの 3 行政区（裕福な郊外地域である North West Corstorphine、地方主導の住宅計画に乏しい Pilton、不均質なインナーシティである Haymarket）の有権者名簿から無作為に抽出した女性に郵送した。社会的にも経済的にも広い範囲から女性の事例を集めるために、これらの行政区を選定した。389 枚のアンケート用紙が回収でき、全体の回収率は 72% であった。またアンケート調査は、回答者の補足資料によって 45 人の詳細なインタビューの追加を含む。アンケートの最後で、回答者は、この調査にさらに協力するつもりがあるかを尋ねられる。インタビューした女性は、自主的というよりも、こちらからの追加連絡に応じてくれたはじめの 45 人だった。ほとんどの場合、インタビューは回答者の自宅で 1 時間から 3 時間行った。回答者たちは録音を許可してくれたので、あとでこれを文字に起こした。

アンケートのサンプルは母親を相当数含んでいた

が、身体的障害を持つ女性や各社会階層、年齢集団の女性を広く含んでいた。研究では、女性の民族的なバックグラウンドと性的指向の影響を検証することもねらっていたが、非白人や非ヘテロセクシャルである女性が少ないため、これらの変数を統計的に分析することは不可能であることが、アンケート結果からわかった。伝統的なシステムを用いて女性の社会階層を決定することは難しい (Pratt and Hanson 1988) ので、4 つの基本的階層をつくるために教育、収入、職業を考慮した等級システムを用い、それぞれの回答者に対して社会階層の代替基準を適応した。ある回答者の例で、21 歳まで教育を受けた銀行支配人は、年収が 2 万ポンド以上あって、各指標において高い得点を得ていることから SC4 (最も高い社会階層) に位置づけられた。ランク付けに、一つ以上の要因を用いたため、例えば、教育は受けたが就業していない女性、あるいは、退職した低収入の女性が、必ずしも最も低い社会階層に自動的に位置づけられるわけではない。この方法には、現在議論されているようにいくつかの欠点がある (Pain 1993a) のだが、依然として女性の社会階層決定について不十分な指針であるにもかかわらず、調査の分析にあたって一般に用いられてきた方法よりもおそらくずっと典型的な方法であるだろう。ところが、回答者の 11% については、ランク付けを採用するための十分な情報は有効ではなかった。したがって、社会階層の変数を用いた分析は、無効回答を引いたサンプル数に基づいている。

## 2. 暴力的犯罪への恐怖についての地理に向けて

犯罪に対して抱く恐怖感を説明するための多くのアプローチは、地理学や関連領域で活動している研究者によって試みられてきた。恐怖についての地理に関するフレームワークを組み立てた後、女性の FOVC に照らし合わせてみると、これらの見解に関する批判のいくつかは、以下にあげられよう。

### (1) 「犯罪」の地図化と「怖い」地域

犯罪への恐怖に関する空間パターンを理解するにあたって、一般的なアプローチは、人々が被害者になることを最も心配している地域に加えて、犯罪が問題化するとと思われる地域を地図化して明らかにすること

や、危険度と恐怖の関係について結論を導き出すことであった。しかしながら、このアプローチを暴力的犯罪に適用する際、特に女性の体験や知覚が関係するような場合には、いくつかの問題がある。

第一に、もしそのような地図が正しい事実を表しているならデータは信頼されるべきものにちがいないが、暴力的犯罪に関する統計的な証拠は極端に制約されている。イギリスの犯罪調査が示しているように、暴力的犯罪やとりわけ女性に対する性的暴力は、警察に対してのみならず、確かに、調査方法を利用している研究者に対してもきちんと報告されていない (Stanko 1987)。地図化するというより詳細な研究方法から、女性に対する暴力が深刻な段階にあることがわかった (例えば、Hall 1985; Hanmer and Saunders 1984; Painter 1991)。虐待という隠れた形態を明らかにする点では、地図化は優れた洞察力を提供し、有用であるけれども、この方法の十分な有効範囲という点において、あるいは虐待が最も通常ありふれて起こりやすい場所を正確に表すという点においては、このような情報について一般に「地図化する」ことが適切であるとは限らない。女性に対する暴力事件の大半は、家庭あるいはその他の私的・半私的な空間で起こっている。都市でのレイプに関する正確な地図は、裏通りや公園よりも、もっと寝室に注目したほうがよいだろう。

第二の問題は、地理的犯罪と恐怖のデータに関する解釈についてである。女性の間にある犯罪への強い恐怖感、犠牲となる場合が実際には低い、ため、上手く説明できないということがわかった (Hough and Mayhew 1983) けれども、犯罪と恐怖の影響関係はしばしばかに測定されてきた。犯罪と恐怖の影響関係は有力な結論とされたし、この知見に基づく FOVC への政策的な対応は厳しく批判されてきた (Stanko 1990b)。しかし、この結論はもはや多くの信頼を失っている。暴力的犯罪についての主観的な危険度を測定することが非常に難しいことは別としても、恐怖は主観的であるがゆえに、じかに測定できるものではない (Young 1988)。女性の FOVC は、暴力そのものに対する女性の感じ方と同じように、性的嫌がらせのような人を脅かす行為である副次的な暴力の形態によっても助長され、性別の不平等よりももっと広い範囲において、FOVC の原因が関係している (Jones et al. 1986; Stanko 1987; Valentine 1989)。おまけに、「理性的」あ

るいは「非理性的」といったことが意味をなさないような、両極性を有した恐怖を分類する感情や認知が絡み合った複雑なものを「恐怖」は包摂している。

この場合、犯罪地域の地図化を全く否定しているわけではない。例えば、背後から襲ってくる場合が考えられるように、恐怖はある特定の地域でより高く感じられ、アンケートでの質問の中で、危険度はある場所に特化しているようだ。したがって、このような地理的分析レベルは妥当であるに違いない。しかしながら、何が恐れられ、誰が怖がっているのかについて、もっと細かな注意を払う必要がある。犯罪を生み出しているのも、犯罪に怯えているのも、地域そのものではない。女性の属性を考慮して犯罪の影響範囲や犯罪への恐怖を地図化することは、取り締まりや防衛策の目安として有益であるが、暴力的犯罪に関する地理にとつては妥当な段階とはいえない。

## (2) 建造環境のなかの恐怖

本研究に関連する研究やその他の有用な研究は、暴力的攻撃への恐怖と関係がある建造環境の特徴に注目してきた。都市プランニングのなかで、かねてから何ら言及してこなかった集団の関心を集めるために広範な活動が行われたが、その中の一つとして、1980・90年代には都市空間の中で女性が抱く恐怖について、かなりの政策的な注目が集まった (Matrix 1984; Trench et al. 1992; Women's Design Service 1988)。このアプローチは、地図化に際しての巨視的なアプローチよりも、もっと明確に「誰が何に」、「どこ」で恐怖を感じるのかに答えを提示している一方、犯罪や不安を「浮き彫りにする」試みが「なぜ」という疑問を捨象していることに対しても常に批判を行ってきた。また、犯罪の社会的・政治的原因を考慮せずして建造環境に注目することへの危険性も問うものであった (Valentine 1991; Women's Design Service 1988)。このことは、このアプローチが政策的に、通常起こりやすい犯罪や恐怖の防衛策となってきた一つの理由である (Smith 1987; Stollard 1991)。たぶん最も重要なことだが、公的な場所に女性が感じる恐怖を正当化するような動きがある一方で、政策立案者が暴力的犯罪が起こる一つの場所として公的空間に注目することによって、性的暴力に関する地理の真実を否定してしまう危険性が出てくる。これは、環境的に恐怖を暗示することやそこで感じる

恐怖との関係を否定するものでも、また、政策的手段によって場所に特化した恐怖が取り除かれることに対しての意義を疑問視するものでもない。今回の研究から、FOVCは常にある特定の場所において示されることがわかったが、この傾向は社会地区、建造環境の様式、また地域的景観の様相によってほとんど変化しないことを述べておく。おそらく環境それ自体は相対的に小さなスケールで恐怖を空間的に再区分するのだろうが、恐怖についての説明は他にある。本稿での分析は、空間をとまなう社会関係の相互作用に注目したものである。

### (3) 恐怖に関する地理についての理論的枠組み

社会地理学者による犯罪への恐怖に関する近年の研究は、ジェンダー化されたFOVCの分析にとって一つの妥当な理論的枠組みを与えている。なぜなら、近年の研究は恐怖の空間的広がりや、行動や都市生活の質的レベルに関連した恐怖の影響を強調しているからである。近年の研究において、恐怖は、社会において不利な立場にある人々の境界線と密接に関わっていることが明らかにされた(例えば、Crawford et al. 1990; Kinsey 1984を参照のこと)ことから、これらの議論は、恐怖と社会的・政治的・経済的な不平等との関係にかかわるものである。近隣集団への関わりが無いと感じている人々、また自己統制できないような精神的に孤立化した、社会的に受け入れられないような人々、社会にあつて周辺化され、また権力のなさを実感しているような人々は最も犯罪への恐怖に陥りやすい(Smith 1989; Van der Wurff and Stringer 1988)。安心感を欠いた漠然とした感情は、犯罪に対して特殊な恐怖感を抱くようになるし、その恐怖感は空間認知や行動のなかで明らかにされていく。Smith (1986, p. 177)は次のように述べている。

犯罪へのインフォーマルな対応の意図しない帰結は、国家のポリティカルエコノミーに現れる支配と従属と抵抗のパターンを含んでいる。

女性が感じる恐怖についての地理もまた、この広い枠組みの中に位置づけることができる。Valentine (1989, 1992)は、家父長制構造やイデオロギーの形成や再生産の際に空間が果たす役割について議論している。したがって、女性が感じる恐怖についての地理

は、政治的関係の支配パターンを補強していると言える。しかしながら、本稿での研究報告が示すように、家父長制的関係と男性の暴力に対する女性の認知は、絶えず互いに変化し、また影響し合っているのだ。本稿の照準は、これら近年の地理的分析に依拠したものである。女性のFOVCに関する地理にとっての一つの分析的枠組みは、調査からの経験的データに基いて展開している。

### 3. 女性が感じる恐怖に関する地理についての枠組み

#### (1) 都市空間利用における制約

地理的分析の第一番目の役割は、社会的に不利な立場についての研究に精通した領域において認められる。暴力的犯罪への恐怖は、ライフスタイル、移動性、行動へ相当の影響を及ぼしている。個人の行動空間は男女で大きく異なり、攻撃への恐怖は、町や都市の中での女性の自由な移動に対して最も影響を及ぼす制約の一つである。暴力的犯罪によって強いられた空間の制約は、二つのレベルにおいて作用することがわかる。

第一に、ライフスタイルにおける影響を質的に測定することは、認知された恐怖への反応を調べることによって可能となる。第1表では、女性の生活の中で性的攻撃への恐怖について、その影響のいくつかをあげている。ドアに応答しないという防衛策から、特定の地域や道路を避ける、職業・余暇・社会的活動を選択するにまで及んでいる。しかしながら、単に人々が避けている行動に重点を置いた以前の犯罪に関する調査よりも、今回の危険への対応行動の方が女性の生活範囲により広がっている(Stanko 1990a)。ある特定の時間と場所を上手く処理するような方法を用いながら、攻撃に対して知覚された恐怖への反応の中で形成された行動上の適応の多くは、非常に巧妙なものである(Valentine 1989)。都市のある地域に夜までいる女性にとって、攻撃への恐怖はおそらく「現実の晩鐘の合図」を意味するものだろう(Kinsey 1984)。しかし、非常に制約された状態において女性が特定の空間や支配を被り続けるなら、攻撃への恐怖はもっと頻繁に生じ、それと同時に、女性は付け入る隙のない警戒状態やよく練られた防衛手段を備えるようになる。

第二に、質的調査から、激しい攻撃への恐怖によ

って強いられる制約が、計り知れない感情的・心理的影響を与えることもわかる。幼児期や青年期において、社会化された行動から芽生える潜在意識のレベルで、感情的・心理的影響が作用する。あるいは一定の年月を経て身に付いたことが、日常生活の一部となっていく。これらの制約は、一般に、女らしさやセクシュアリティについての概念をより補強している。つまりこれらの制約は、公的空間である特定の活動を阻み、独立した移動を制限し、「適切な」服装や行動という非公式の取り決め事に対して秩序を維持する。だから、恐怖の感情を処理する過程は、共有された公的空間の外にいる時も、装うという行為によって身体を守ることと同じように、精神的にも防衛していることを意味する (Gardner 1990)。空間の制約は、恐怖の影響を最も被るものの一つとして、多くの女性が認識した幸福や自己認識に大きな影響を与える。

私は無意識に防衛をしてるのよ。だけど自分でそのことに気づいてないってことを、知っておかないとね。今日、話をするまで、自分が防衛をしているなんて、本当に気づきもしなかったわ。いつも何かする時、多少なりともそのことをやっているという意識があるでしょ。でも、防衛をしているのに、そのことに気づいてないのよね。それは、自分自身を守っているという心の内に生じる感覚の一種に違いないわ。(Elizabeth, Haymarket)

そうねえ、どんなところでも自動車を選ばないといけないう意識は好きじゃないわね。そーよ、以前の自分のように、自由にしたいもんだわ…数年前は、ドアを開けたままにしておくことができたけど、今じゃ、中に入る時にまずにすることといったら、ドアを閉め、ロックし、おまけに貫抜きで閉めることだわ。それって違うでしょ。時々、まるで要塞の中にいるように感じるわ。安全のために、ほかの人から自分自身を守るためだってことはわかる。「ちえっ、楽しく歩きたいのに」あるいは、それに似たようなことをしたいのに、って思うと、私は時々頭にくるわよ。(Diana, Corstorphine)

## (2) 危険の認知についての公的空間と私的空間の相違

行動や自己認識に関するこれらの制約が示すように、女性の FOVC への影響は主に公的空間において示される。現に、女性が感じる恐怖についての地理は、空間を公的なものと私的なものに、より明確に象徴的に分離する (Valentine 1989)。空間の境界を越えて存

在している性的暴力や性的嫌がらせについての女性の経験には、両者間で実態のある明らかな違いはないとしても (Painter 1992; Stanko 1988)、ほとんどの女性が、公的空間を危険なもの、私的空間を安全なものと思込んでいる (第 2 表)。女性たちが危険であると感じているエディンバラでの場所や環境についてのインタビュー記録は、このギャップを明らかにしている。攻撃されると女性が感じているのは、暗くて、寂しい、よく知らない場所である。

一般に、夜間どこでもでしょ。うーん、それとも、Wester Hailes [公営住宅] のような高層のアパートかしら。(Olivia, Corstorphine)

そうね、ここではつきりしていることは、遠回りになるのは Meadows [市の中心公園] があるからよ。早朝にせよ、夜遅くにせよ、Meadows を横切る方法がないのよ。うーん、基本的にはその周辺に人が少ない、孤立した場所なのよ。どこもかしこも暗いの。(Yvonne, Haymarket)

このような「空間の矛盾」(大多数の女性にとって、暴力が最も発生しやすいのは家庭であること) が存在しているので、犯罪や恐怖の分析において私的空間での暴力にもっと注目する必要がある。今回の調査では、29.3%の回答者が性的・身体的な暴力事件(性的嫌がらせの事件とは区別して)の被害者で、暴力に関係した男性のほとんどすべては被害者がよく知る人物である。しかも、回答者の4分の1近くは、私的空間で被害を受けることを怖れている(第2表)。幼児期あるいは青年期において顔見知りになった男性から性的・身体的な危険を体験することによって、恐怖感が植え付けられる傾向がある。公的空間で男性と偶然にも出会うことは、「予測不可能で、潜在的に統制できず、それだから女性を脅かしているのだ」(Valentine 1989)。そしてこれは、多くの女性が公的空間に恐怖を感じている一つの理由である。しかし、このことから逆に、私的空間や親しい人たちが予測可能で、統制できるものとして常に経験されていると仮定することは、間違いだろう。なぜなら、何人かの女性にとっては、暴力の体験や FOVC は、家庭が安息所ではないことを意味しているからだ。犯罪へのこのような私的な恐怖感は、空間や場所についての女性の体験を形成する可能性がある。例えば、Valerie は、夫による強制的なレイプから彼女が思ったことを述べている。

夫がセックスを強要する場面を避けるためなら、私はどんなことでもするわ…夫が寝入ってくれることを期待しながら、掃除機をかけるという口実で私は階下の部屋に居たの。でも、一緒に住んでいる夫から避けられない事態が及ぶ時、それはいわば避けることができない重大な問題なのよ。そう、要求を聞かないようにしなきゃ…特に子どもがいるんなら。ある状況のもとで何の拘束もなかったら、一人で家の外を歩くことだってできるし、大声やわめき声、悲鳴をあげることも、自分を守ることでできるんだから。(Valerie, Corstorphine)

### (3)「安全な」場所と「危険な」場所への空間の社会的構築

様々な空間が個人の安全性にとって特別な意味を持っているということは、どのように認知されるのか？ 男性の暴力に女性が感じる恐怖についての研究で重要なのは、公的空間と私的空間がイデオロギーレベルにおいてジェンダー化されるその過程である。とりわけ私的空間がしばしば攻撃される場所であるにもかかわらず、なぜ多くの女性が公共の場所を不安な所だと誤ってとらえているのかということが問題なのだ。フェミニストコメンテーターの Hanmer and Saunders (1984) と同じく、このようなことは家族、女性たちの公的空間の体験や、メディアや社会的関係から女性が受け取る性的な危険に関する情報に不正確なところがあるからだ、Valentine (1992) は言う。

女性が感じる恐怖についての地理において、明らかな矛盾があることを確認する一方、情報が氾濫しているからというよりもむしろ、情報が氾濫しているにもかかわらず情報の不適当な組み合わせが続いているということを、本研究は指摘する。クライストチャーチにおける Pawson and Banks (1993) による研究も指摘しているように、実際に、性的暴力に関する地理について彼女たちが思っていることが見当違いであるという訳ではない。しかしながら、一般的な危険度については、かなりの開きがある。一般に、もっともレイプを犯しそうな人は誰ですか、と回答者に尋ねたところ、実際には、女性の半数近くが面識のない者と答えた。ところが、万一あなたが被害者になるとしたら、もっとも考えられる強姦者は誰ですかという質問をすると、その割合は3分の2以上にまで増える(第3表)。親戚、友人、知人によってもっともレイプを受けそう

だと考えている女性は、10.6%に過ぎない。しかし、43.4%の女性は、一般にもっともレイプを犯しそうなのは被害者と知り合いの男性であると確信している。さらに、一般的な場合と、自分が被害者になるかも知れない場合とを比較すると、「わからない」と回答した女性よりも2倍近くの女性が、もっとも強姦者として考えられる者は「思い浮かばない」と回答している。

これらの結果は、1980年代末以降、女性に対する家庭内暴力や性的暴力が明らかにされてきたという大きな変化によって説明が付くだろう(Dobash and Dobash 1992)。面識のない者によって甚だしく攻撃を受けるという相変わらずの事件が多いこととあわせて、メディアによる危険についての情報の公表は、女性の注目を集めた。ところが、日常生活の中で恐怖をどのように感じているかについて、暴力は特定の人々や特定の場所と関連しており、また、多くの女性が暴力についての共通の知識を持っているにもかかわらず、それに反して私的空間でのレイプが続いているというのは重大なことだ。女性へのより詳しいインタビューから、次のことが明らかになった。すなわち、個人の危険度と女性全体の危険度について異なる見解を持っているという表面上矛盾した状況は、地理的にも、また社会的にも、自己から暴力を遠ざけることによって生み出される。

ええ、私はたぶん[暴力は貧困地域とつながっていると考える]、なぜって、貧しさのためよ。人は多くの点でこういったことに駆り立てられるのよ…家庭内暴力については、おそらく、解雇されたことや、お金やその他いろいろのものが不足しているという現実のフラストレーションが、家族内で起こるこういったことの原因となっているでしょう。(Christine, Corstorphine)

家庭内暴力についてのアンケートに少しあったし、そういうことってまったく共通していると思うわよ。でも、瞬間に素早くドアの外に出るから、家庭内暴力が私の身に起こるとはならないでしょうね。(Deborah, Pilton)

個人的に私に関する限りでは、家庭内暴力にはまったく関係がないわ。私ね、はじめて会う人を評価することがとっても上手なのよ。だからわからないのね、わたしはこれまで怖いなんて思ったことないの、少しもね。(Marie, Corstorphine)

この調査では、恋人や夫からの暴力に苦しんだ女性の体験を示しているが、はじめて男性に会った時点で、暴力的な男性かそうでないのかを見極めることや、暴力へと進んでいく関係から逃れることは、常にたやすいこととは限らない。しかし重要なのは、ほとんどの女性は、私的空間あるいは公的空間のどちらにおいても性的暴力の被害者になっていないし、なることはないということだ。したがって、疑問の中心は、女性は親しい知り合いからの暴力に恐怖を感じないのに、なぜ面識のない者からの暴力に大きな恐怖を感じるのだろうかということである。明らかに、メディアや社会関係からの情報は、危険な場所に関する認知形成に影響を及ぼしているが、情報は、既存の知識、個人のおかれた状況や体験に基づく影響に応じて、女性によって意味づけされている。

女性は、公的な場所で社会という関係に実際に身を置くことによって、空間や場所を認知するようになる (Painter 1992; Valentine 1992)。性的嫌がらせについて共通した体験には、女性自身、かなりの関心を示している (Pain 1993a) が、それゆえに公共の場所や面識のない者が、予測不能な、脅かすものであるという認識を助長することになるし、また自分自身の攻撃されやすい肉体的な弱さに応じた空間認知を一層強化することにもなる。第4表は、事件の重大性によって影響されるのだが、性的攻撃の被害者になることへの心配をしばしば生じさせるような、公共の場所において多くの回答者が体験した嫌がらせ行為を示している。インタビューの中で、逸話に富んだ彼女たちの証言から、上記のことが立証された。

昨夜、私は家まで跡を付けられたのよ。今、私には、それが危険なことだったのか、暴行されていたのか、私を巻き込んでそっとするような状態だったのか、わからない。だけど、男は歩調を早め、彼の呼吸にアルコールの臭いを感じとることができるほど、私の背後に近寄って来たの。はじめは「誰か他の人も家の方に歩いているだけだから、動転しない」と思ってたけど、でもどうとう、家まで走ろうと決めた。男はたぶん、ふざけているんだろうと思ったんだけど、そのことを確かめるために、ぐずぐずするつもりはなかったのよ。(Sheila, Haymarket)

その頃私は Dalry Road の近くに居たから、友だちと私はよく一緒にクラブへ行って、私たちは Coffin Lane [棺桶道] と呼ばれていた地下道を通ったの。そしたら、一人の男がそこで私たちに付いて来たの。走ったわよ。ラ

ッキーなことに、地下道の突き当たりで Dalry Road に着いて、そしたら男は行ってしまった。だけどねえ、本当にびっくりしたわよ。いつも地下道を通っていたけど、これまで心配するようなことはなかったのに、一度でもそんなことがあると、恐くて行けなくなったわね。

(Maureen, Corstorphine)

#### (4) 性的暴力と女性の空間についての社会統制

犯罪は、空間が支配的集団によって占有される一つの重要な手段である (Smith 1986)。また、多くの女性にとって FOVC によって強いられた空間の制約は、社会的に不利な立場が再生産される媒介としてとらえることができよう。男性の暴力に関するフェミニスト理論は、男女間の暴力パターンの中で女性の従属的な社会的・政治的地位を関係づけており、また女性を抑圧する中心的な役割を行っているものとして恐怖をあげている (Brownmiller 1975; Griffin 1986; Hanmer 1978)。確かに、空間行動における女性の FVOC の結果は、ジェンダー関係の構造を映し出すばかりか、それをいっそう補強するものである。

例えば Pain (1991) や Segal (1990) によって明らかにされてきたフェミニスト理論全体の中には、多くの矛盾と困難が存在している。フェミニスト理論は女性抑圧の重要な決定要因として、偶発的で、単発的な性的暴力をあげている。すべての男性は、レイプへの恐怖から生じる女性の社会統制によって利益を得ていること、また、男性/女性の関係は元来不平等であることを、フェミニスト理論は含んでいる。普遍的に、男性の虐待に弱い者としての女性のイメージや、抑圧に直面した際の受動的な女性のイメージは、フェミニストの社会統制理論による挑戦よりもむしろ一層補強されてきたと言いうことができよう。逆に、一般に女性は暴力によって彼女たちの生活に強いられた抑圧に気がついていること、そして彼女たちがそのような抑圧に腹を立てていて、これらの抑圧からの影響を阻止しようとして彼女たちなりの実践を決めているし、時には巧みな手段が講じられることを本研究のインタビューは示している。しかし、この理論全体によって示唆されている意図性や普遍性の問題にもかかわらず、その結果は相変わらずのものである。多くの女性の生活に社会統制として作用している性的暴力に関わる概念は、あらゆる研究証拠がここで提示した一つの有効な概念を見落としているように思われる。

#### (5) 恐怖についての時間的次元

いくつかの事例が示しているように、女性の FOVC は、その空間的広がりと同様に、その時間的な面からも特徴づけられる。このことは危険を暗示するものとして暗いということが関係していること、また昼間と夜間と同じように、夏と冬での安全に対する感覚が違ふことによって、一般に明らかである。女性が感じる恐怖について、その時間的特徴は Valentine (1989) や Warr (1990) によって詳細に議論されているものの、このような相対的に軽視された次元についてはさらなる研究の余地がある。時に、ライフステージや生涯の間の出来事に大きく影響されるように、個人の FOVC は長期間にわたるダイナミックなものであるから、空間的な問題を扱う際のアプローチと同様に、ライフストーリーを用いた恐怖についてのインテンシブな分析が必要である (Pain 近刊予定)。

#### 4. 社会的差異と女性が抱く恐怖

本研究の 2 番目の目的は、女性間における経験や FOVC の認知についての差異を検証することである。エディンバラに住む女性たちが恐怖の程度やその範囲について言及した内容は、この調査結果にとっておそらく意外なことであったが、いかに恐怖の体験がなされ、かつその体験が女性の生活に関わるより広いコンテキストに影響を与えているかについて、個々の女性の間で明らかに多くの差異がみられたことである。そのうえ、FOVC は静的な状態にあるのではなく、空間・時間・ライフステージ・社会的コンテキストに応じて変化することが、各女性へのインタビューからわかった。FOVC に関して女性の体験に影響を及ぼすもっとも重要な要因のいくつかは、現在検証中である。

##### (1) 社会階層

女性の FOVC に関して社会階層の影響については、二つの議論がなされてきた。一つは、女性にありがちな性的暴力に対する恐怖は階層によって影響されると示唆したもの (Gordon and Riger 1989)、もう一つは、性的暴力への恐怖はすべての女性を襲うが、階層や収入、教育の面で優位な女性は、ライフスタイルへの有害な影響をたやすく回避することができるというもの

(Painter 1992; Stanko 1990a; Valentine 1989) である。女性がいかにして危険を避けることができるかということに社会階層は影響しているけれども、FOVC は社会階層をこえて女性の間で等しく広がっていることも、本研究から確認する。居住地域と社会階層を分けて考えることは難かしいかもしれないが、3 つの研究地域はかなり異なっているものの、性的・身体的暴力に対して感じる懸念の大きさには、各地域でさしたる違いは認められない。

恐怖を感じる程度に影響を及ぼしているのは、社会階層よりもむしろ女性が公的なものと私的なものとの配置に恐怖を抱くような、場所や状況、人間に強く関連していることである。あらゆる社会階層の女性は同じように、外部の面識のない者から暴力を受けることを怖れている。しかし、私的な暴力の被害は、社会階層に密接に、しかも有意に関係していることがわかってきた (第 5 表)。もっとも高い階層 SC4 に属する女性に比べて、3 倍以上も、もっとも低い階層 SC1 に属する女性は、面識のある者からの性的な暴行に怯えている。この関係は、面識ある男性によって家の中で性的暴行を受ける恐怖について、きわめて有意である。類似のパターンを身体的暴力に対する恐怖にも読み取ることができる。すなわち、社会階層の低い女性、とりわけ SC1 に属するような女性は、家や面識ある男性に起因する家庭内の偶発的な事件に怯えているのだ。

これに対して、次のように説明することができよう。つまり、私的空間における FOVC の高い割合は、私的空間での暴力のいくつかの形態を体験している労働者階級の女性とより強い関連性があることだ。しかし、今回の調査で報告されたような家庭内でのレイプやそれ以外の暴力的攻撃に関わるあらゆる偶発的な事件は、中産階級の女性にも起こっている。ところが、本調査におけるこれらの報告は、自らの意志に委ねられたものであるし、自分から切り離れた出来事として暴力を分類する中産階級の回答者の強い傾向が反映されている。また、その他の調査からも、本調査と関連したこのような強い傾向が報告されている (Hough 1986)。階層と女性に関する暴力との関係について、混乱した把握がどこかあるようだ。公式統計や何人かの研究者は、労働者階級の女性ももっとも多くの暴力的犯罪に悩まされていることを示唆している (Crawford et al. 1990; Painter 1991; Segal 1990) が、警

察に報告された、あるいは福祉団体の注目を引くような「表面化した」偶発的事件は、生活費について何の自立的手段も持たず、どこにもほかに頼るところのない女性に起こりやすいとされている。

社会階層によって恐怖を感じる場所と性的暴力の危険度との矛盾がほとんど説明できることを、この調査結果は示している。つまり、攻撃されやすい場所について共通して正確な認識を持っている中産階級の集団であるけれども、彼女たちにはかなりのズレがあるのだ。SCI に属する女性は彼女たちのまわりで生じている家庭内暴力について、より個人的な知識を持っているということが、インタビューによって裏づけられる説明のひとつである。近隣地域の中で、物理的にも社会的にも不利益な状況に置かれている Pilton に住む SCI に属する女性の大半は、他の研究地域に住んでいる女性ほど澆刺としていない。(個人的に暴力の体験がある女性を除き) 中産階級の女性にとって、家庭内暴力に関する知識は、彼女たちがしばしば読んだりテレビで見たりしたことに依存しているので、暴力への恐怖は、確かに自分自身から離れたところにある。

どのようにして女性が恐怖に反応し、そして乗り越えるのかについて、社会階層も何らかの関係がある。裕福な女性ほど、彼女たちのライフスタイルにおいて潜在的に悪影響を及ぼす恐怖をたやすく回避することができることについては、すでに議論されている (Painter 1992; Valentine 1989)。しかしながら、低い社会階層にある女性ほど、高い階層にある女性よりも恐怖を感じるような抑圧をもっと多く体験していることについては、今回の研究では何の裏づけもできていない。反対に、高い階層にある女性に注目すると、いくつかの場合について、なんらかの関係があるようだ (第 1 表)。中産階級の女性はおそらくこの種の抑圧を認識していて、公に報じているのだから、彼女たちの恐怖の回避の違いにはいくらか注意を払うべきである。中産階級の女性たちは家庭外でのレジャーや社会活動への機会をより多く持っていること (Green et al. 1987)、あるいは、収入が高いので恐怖を感じなくてすむような個人の交通機関への近接手段を持っていること (Painter 1992) を、調査結果は反映している。もしも、女という性であるがゆえに安全を手に入れることができないとしても、どんな理由であれ、中産階級の女性については安全を手に入れることにおい

て、なんらかの違いが認められることは明らかである。彼女たちの回避の違いは、公的空間を避けるためにしばしば利用する自動車への近接手段があることや、タクシーを利用できる程の金銭的余裕があるなどの女性の特徴として把握できる。

公的空間を避けるようなこのような能力が攻撃への恐怖を和らげるということ、証明するものは何もない。確かに、原因と結果を設定することは問題であるが、防衛手段を用いることによって FOVC が緩和されているようには思えない。いつも自動車を利用する女性は、利用しない女性と同様に、公共の場所での安全について関心を示している。個人の輸送機関が必要になってくるような場合、この機関に過剰に依存していることが、公的空間との関わり、公的空間の危険度についての公正な見方や、公的空間の巧みな回避に欠けていることを示している。

もし私が夜に手紙を出しに行くなら、郵便ポストまで車で行くわ。それとも安全な道までね。そうねえ、夜に出歩くななんてこれまで考えたこともないわ。そんなことするつもりはないの。子どもと一緒に、公園を横切らないもの。子どもと遊ぶ場所だって、今はしていないけれど、公園をまたいで 100 ヤードくらいは車で回り道をしてたわ。(Myra, Corstorphine)

さらに数人の女性は、いくつかの点で公共交通機関と同様に、自分たちの運転が安全ではないと感じていることを述べた。

現に数年前、車が故障してその中にやむを得ずいたことがあるの。とっても恐かった。車の外に出る気はなかったわ。でも後で、車の燃料系統が切れていたことに気づいたの。何が起こるかかわからないけれどね、車の中は安全だと言うつもりはないわ。なぜって、もしなにか起こっても、完全に自分自身に降り掛かってくるんだから。(Deborah, Pilton)

このように、階層は、女性の FOVC への反応の仕方にも影響を及ぼしている。しかし、恐怖の範囲や強さは、彼女たちのジェンダーによってかなりの程度まで決定される。

## (2) 高齢者

明らかな結果は期待できないかもしれないが、同

じように、年齢は有力な変数として考えられるだろう。過去の調査は、他の年齢集団に比べると高齢者の方が危険度はかなり低いけれども、暴力的犯罪により一層の関係があることや、路上での安全については高齢女性がかたがたも脅かされていることを言及している (Mirrlees-Black and Maung 1994)。私的空間と公的空間の違いによって、異なる年齢集団の間で FOVC に対してさらにまた特性が付加されるというこのような結果や提示に対して、本研究は矛盾する。

本研究では、公的空間において面識のない者から身体的・性的に攻撃を受けることへの恐怖は、若い女性に比べて高齢女性はさほど有意を示さなかった (第 VI 表)。高齢女性が暴力への恐怖によって制約されているようにも思えない。例えば 18-30 歳の女性は、60 歳以上の女性よりも、性的攻撃への恐怖のため一人での外出を避けているようだ。これは、特に夜間の外出が高齢女性に少ないという事実に関係しているかもしれない。しかしインタビューに応じた高齢女性は、メディアや専門的研究によって予想された恐怖について、自立と抵抗という面において、無力な被害者像とは違う相当有意な結果を示した (Midwinter 1990)。

[攻撃への恐怖] みたいなもののために、家に居るくらいなら、外へ出掛けた方がましよ。みんなが不安だってことはわかるわ。でも、かえてそれは、外へ出掛けた方がもっとましだって私に思わせることになるわね。  
(Moira, Pilton)

私のハンドバックがとっても重いってことが、その理由の一つなのよ。そのバッグの鈍い音は男を怯ませるでしょう [笑う]。私、いつも傘を一本ね、バッグの底に入れていてね、だからバッグは余計に重くなるけど。傘を必要とする万一の場合のためにね。(Sharon, Pilton)

ところが、家庭内での面識者による攻撃への恐怖に関しては、年齢集団の間で大きな違いはみられない (第 6 表)。調査では、高齢女性についても、家庭内暴力の体験が若い女性よりも僅かながら上回っていることが報告された (Pain 1995)。それにも関わらず、本研究が指摘しているのは、高齢女性の FOVC の空間パターンが、現実の暴力的犯罪のパターンに密接に関係していることである。犯罪学者による初期の空間的説明では、女性の抱く恐怖が研究にとって取るに足らないものとされたように、高齢者の抱く恐怖は理性

を欠いたものとしてレッテルづけられ、彼女たちの肉体的な弱さと関係があると言われてきた (Hough and Mayhew 1983)。だから、すべての女性にとって重要な問題となっている私の暴力の高い危険性を軽視してきたのである。高齢であることが、暴力的犯罪についての地理に関する女性の認識を曖昧にしてしまうわけではない。むしろ、長年にわたって「男性が支配的な社会の中で、一般に弱く、従属的であるべきとして、暴力的犯罪についての地理が捉えていること」 (Stanko 1987, p. 134) が、この地理を鋭い洞察力へと導くのである。

### (3) 身体的障害

女性が体験する抑圧を強化するなら、暴力的犯罪は身体的障害をとまなう女性の空間の体験に特定の影響を及ぼすことを、本研究で指摘する。調査した女性の 8.5% が身体的障害をとまなっていて、これらの女性のうち何人かの了承を得てインタビューを行った。この調査結果から、身体的障害は彼女たちに攻撃に対してあがえないと思わせていることや、攻撃への反応ができないように思わせていることがわかる。Glenys は骨関節炎を患っていて、彼女が公的空間を利用する際、次のような恐怖感に制約を受けている。

そうね、私があなたにお話するのは、私たちは同じように走ることはできないってことよ。どういことかって、たった二年前まで私はかなり優秀なランナーだったんだけど、今の私の膝は走ることができないくらいこぼっているの。去年の夏、ここじゃなくてカーディフだったかしら、実際に私ね、ちょっとの間、狼狽したことがあったの。私は裏通りにいてひたたくりに出くわし、物音を聞いて走ろうとしたんだけど、走れなかったのよ。私の両膝は動かないってことが、つくづくわかったわ。  
(Glenys, Haymarket)

身体的障害があるために「容易な標的」として見られる存在、反撃できない存在として心配されていることが、本研究の中で、女性の側から一般に明らかにされた。これらの恐怖感は、差別的扱いを拡大するものであり、ある場合においては、おそらく身体障害者が日常生活のなかで都市空間の利用に際して直面する悩みである。近接手段への身体的制約は、たびたび社会的な対応姿勢のみが反省される。また、暴力的犯罪の事例は、身体的障害を持つ人々がおそらく直面する

であろう「都市問題」に関して、生まれながらの身体上の制約以上に社会的な関係にもっと上手く対処すべきであることを、よく示している。

障害を持つ女性が攻撃への危険に抵抗する防衛手段も、一般に障害のない女性の事例とは異なる(第7表)。障害を持つ女性が外出する時は、一般の女性と同じような防衛しかしていない。ところが、第VI表が示すように、障害を持った女性は攻撃に対する恐怖の反応として、特定の場所、人間、状況などのあらゆるものを迂回する回避行動を取る傾向がある。攻撃への恐怖については、高齢女性の場合と同じように、障害を持った女性の公的なもの/私的なものへの反応の違いは、一般女性の事例ほど明確でない。面識のない者に恐怖感を持つような場合、障害を持った女性と持たない女性との間に違いは確認できないけれども、障害を持った女性は面識のある人に恐怖を感じやすい傾向がある(第7表)。通常危険であると分類された空間に加え、障害は、一見「安全な」空間のなかで被害者の恐怖への意識を高めるようだ。犯罪調査のほとんどは、潜在的に被害に関係のある要因として障害をほとんど考慮していないが、イギリスの Hammersmith と Fulham での調査 (Galey and Pugh 1992) によると、身体的障害を持った人たちが路上で攻撃や暴行を受けるのは、一般の人たちの二倍近くあり、私的空間で被害者となるのはもっとそれ以上であった。

これらの結果を解釈する際には、注意を払う必要がある。まず第一に、今回の調査では、障害のある女性のサンプル数が少ない ( $n=33$ )。第二に、障害に着目することによって、FOVC への弱さを生み出している社会状況において、障害以外の変数を明らかにし、また変数から明らかになることがあるだろう。身体的障害についての問題を扱う社会地理ではこの他にも多数の問題をともなっているため、犯罪への恐怖と身体的な障害との関係については、今後の詳細な研究から成果を得たいと思う。

#### (4) 母親であること

子どもを持った母親にとって、FOVC はもうひとつの一面を提示している。母親の関心事は子どものことばかりではないのだが、教育や危険から子どもを守ることに関係のある活動の多くは、普通、母親に課せられている (Finkelhor 1986)。第8表が示すように、

調査時において 16 歳以下の子どもを持つ、あるいは養育する 195 人の女性が、子どもへの性的暴行に高い関心を示した。これらの女性の6割は、彼女たちが養育している女兒への性的な暴行や虐待を心配している。そして半数の女性たちは、男児についても同じような心配をしている。とりわけ女兒に対する大人や他の子どもからの児童虐待は比較的ありふれたことであるから、子どもに対して抱く母親の不安の程度は十分理解できるものだ。(Baker and Duncan 1985)。今回の研究において、女性の4分の1が、16歳以下の子どもに起こった性的虐待について、少なくともその一つの事例を報告している。

ところが、女性が子どもの安全について不安を抱く空間や場所は、別の矛盾を提示している。私的空間で面識のある大人から受ける高い虐待の危険を無視すると同時に、子どもにとって危険な空間や子どもの行動に押しつけられた抑圧に対して十分に目配りをすることによって、公的空間を避けるための注意を払っているのだ。今回の研究では、母親が「常識的な」知識を持っているにもかかわらず、母親は自分たちの子どもにとって公的空間を危険なものとして、また私的空間を安全なものとして明確にイメージしている。年齢、ジェンダー、社会階層、子どもの能力、両親が把握している空間的・社会的活動を感知する社会統制の程度 (Pain 1994) によって、公的・私的空間の認知過程は影響を受ける。しかし、子どもを養育する女性の関心事は主に公的空間での攻撃であるから、女性の生活の中で子どもを擁護するということが包摂している社会的・空間的な制約は、女性自身の安全に対する関心から生じた多くの制約と絡み合っている。多くの女性は、自分たちの目の届かないところでは、子どもができるだけ時間を費やさないように守ってやると話していた。

私には12歳の娘がいますが、どこでも車に乗せて行くの。夜間に娘が出掛ける所で、感心できないような場所が多くあるんです。(Valerie, Corstophine)

私は、暗くなると同時に外から子どもたちを呼び入れて、外出させないの。実際にはね、暗くて見通しが利かなくなる6時から、子どもたちは家の中に居なければいけないのよ。あなたはとにかく自分自身のことしか心配する必要がないでしょうから、私が言っていることはまるで余分な心配よね。でも、私はそういうはっきりした理由で夜間外出はしないの…だから、子どもたちにも私は同

じことをさせているのよ。(Jeanette, Pilton)

多くの女性にとって、子どもを案じることは公共空間を案じることである。だから、このような心配から、大人社会のなかで子どもを屋内に置いておくという結論に至る。私的な状況のなかで攻撃されるような子どもの弱さを心配する多くの女性にとって、子どもを守ろうとする感情的・身体的な影響は、よりいっそうの負担となっている。4人の子どもの持つ Amanda は、子どもの時に近い親戚によって虐待を受けた。彼女は、自分の子どもたちには同じようなことが起きないようにと、あらゆる努力を尽くしている。

私は自分の子どものことになると、偏執狂になるの。家にお手伝いさんと居る時でさえ、また、私たちが誰かを訪問する時も、私はいらいらしているわ…そうね、私は、他人の家で一晩中、娘が過ごすことが嫌なの。なぜって—私がその人たちをよく知っているならともかく、もし知らなければ、娘を泊めさせたりしないわ。私は人をまったく信じることができないの…子どもたちにトイレの練習をさせていた頃、決して自分たちのパンツを下ろしたままで走り回るようなことはさせなかったわ。知らない人が入って来た時も、子どもたちは服を着ていたわよ—そうしないと私は許さなかったのよ。どんな時にもね。家に来たある人をね、長男の友達んだけど、私は「いや、彼は嫌いだよ」と思ったの。首の後ろに髪を結んでいて、それが不安な気持ちをかき立てるのよ。くだらないでしょ。くだらないでしょ。でもそれがいつものことなの。私は家から離れるわけにはいかないのよ。(Amanda Pilton)

不安がたやすく正当化されようが、されまいが、女性の養育責任は子どもに対する性的・身体的危険についての関心をともなって増大しており、このことが、女性自身にとっての好機に付加的制約を生み出している。

## 5. 要約

本研究では、女性の間には身体的・性的暴力に対する恐怖が広がっていて、その影響が浸透していることを示した。安全と危険の認知は、公的空間と私的空間のイデオロギー的な分断に密接に関連している。ここ10年の間で、私的空間での暴力の危険に関する知識はめざましく向上したけれども、男性の暴力に対して

女性を感じる恐怖は、いまだ共通して公的な場所での恐怖として表されている。このことは、とりわけ中産階級と若い女性に当てはまるのだが、彼女たちが感じる恐怖は、危険についての地理にさほど正確ではないにせよ、影響を与えている。他の社会的アイデンティティも、ジェンダー化された恐怖をもたらす。そこで本稿では、社会階層や高齢であることの影響に加え、身体的障害や母親であることの影響を考慮した。ジェンダーそれ自身が、女性の FOVC の支配的な決定要素であると同時に、本研究は社会的かつ経済的不平等に関わるこの他の基礎がジェンダーを強化しているという考えを支持するものである。

依然として、暴力的犯罪はあらゆる社会集団に属する女性の空間行動や活動の大部分を制約している。女性の暴力に対する社会的な対応については、かなりの変化がみられた (Dobash and Dobash 1992)。また、若干の進展としては、1980年代にフェミニストによって示されたように、性的暴力に対して「沈黙の企て」(Hanmer and Saunders 1984) がもはや通用しないということである。しかし、このようなことにもかわらず、研究者が示唆するように、性的暴力とそれへの恐怖は女性の一生を通じて同じ統制を及ぼし続けるのである。安全な空間と危険な空間についてのイデオロギーは、依然として場所に反映されている。今日、この状態は、明瞭な地理自身が備えている犯罪防止策のための家族の役割に関する仮説によって支えられている。暴力的犯罪への恐怖は、家族の外部のものとして客観化される (Stanko 1990b; Walklate 1989)。従来の研究は、このような客観化を危険についての地理と誤って捉えてきた。そして、暴力的犯罪に関する地理の現実や、公的空間と同じように私的空間におけるその影響を主張していく必要がある。

## 謝辞

本稿の調査は、ESRC とエディンバラ地区会議女性委員会によるものであり、エディンバラ大学 Susan Smith 教授に指導を受けた。また、初期の草稿に対し匿名レフェリーから受けた有用なコメントに深く感謝する。

## 参考文献

- Anderson,S., Kinsey,R., Loader,I. And Smith,C. (1990): Cautionary tales: a study of young people and crime in Edinburgh. University of Edinburgh Press, Edinburgh.
- Baker,A.W. and Duncan,S.P. (1981): Child sexual abuse: a study of prevalence in Great Britain. *Child Abuse and Neglect*, 9, 453-67.
- Brownmiller,S. (1975): *Against our will: men, women and rape*. Martin, Secker and Warburg, London.
- Crawford,A., Jones,T., Woodhouse, . and Young,J.(1990): *The second Islington Crime Survey*. Centre for Criminology, Middlesex Polytechnic, Enfield, Middlesex.
- Dobash,R.E. and Dobash,R.P.(1992): *Women, violence and social change*. Routledge, London.
- Finkelhor,D.(1986): *A sourcebook on child sexual abuse*. Sage, London.
- Galey,K. and Pugh,H.(1992): *The needs of people with disabilities*. Environment Department, London Borough of Hammersmith and Fulham.
- Gardner,C.B.(1990): Safe conduct: women, crime and self in public places. *Social Problems*, 37-3, 311-28.
- Goodey,J.(1994): Fear of crime: what can children tell us? *International Review of Victimology*, 3, 195-210.
- Green,E., Hebron,S. and Woodward,D.(1987): *Women, leisure and social control*. in Hanmer,J. and Maynard,M.(eds.) *Women, violence and social control*. Macmillan, London, 75-92.
- Griffin,S.(1986): *Rape: the politics of consciousness*. Harper and Row, New York.
- Hall,R.E.(1985): *Ask any woman: a London enquiry into rape and sexual assault*. Falling Wall Press, Bristol.
- Hanmer,J.(1978): Male violence and the social control of women. In Littlejohn,G.(ed.) *Power and the state*. Croom Helm, London, 217-38.
- Hanmer,J. and Saunders,S.(1984): *Well-founded fear: a community study of violence to women*. Hutchinson, London.
- Hough,M.(1986): Victims of violent crime: findings from the British Crime Survey. In Fattah, E.A.(ed.) *From crime policy to victim policy*. Macmillan, London, 117-36.
- Hough,M. and Mayhew,P.(1983): *British Crime Survey: first report*. HMSO, London.
- Jones,T., Lea,J. and Young,J.(1982): *The Islington Crime Survey*. Gower, London.
- Kinsey,R.(1984): *The Merseyside Crime Survey: first report*. Merseyside Metropolitan Council, Liverpool.
- Matrix (1984): *Making space: women and the man-made environment*. Pluto Press, London.
- Mawby,R.I.(1988): Age, vulnerability and the impact of crime. In Maguire,M. and Pointing,J. (eds.) *Victims of crime: a new deal?* Open University Press, Milton Keynes, 101-11.
- Midwinter,E.(1990): *The old order: crime and older people*. Centre for Policy on Ageing, London.
- Mirrless-Black,C. and Maung,N.A.(1994): *Fear of crime: findings from the 1992 British Crime Survey*. Research and Planning Unit Research Findings Paper No.9, Home Office, London.
- Pain,R.(1991): Space, sexual violence and social control: integrating geographical and feminist analyses of women's fear of crime. *Progress in Human Geography*, 15-4, 415-31.
- Pain,R.H.(1993a): *Crime, social control and spatial constraint: a study of women's fear of sexual violence*. Unpubl. PhD thesis, Department of Geography, University of Edinburgh.
- Pain,R.(1993b): Women's fear of sexual violence: explaining the spatial paradox. In Jones,H.(ed.) *Crime and the urban environment*. Avebury, Aldershot, 55-68.
- Pain,R.H.(1994): Kid gloves: children's geographies and the impact of violent crime. Occasional Paper New Series No.1, Division of Geography and Environmental Management, University of Northumbria (available from the author).
- Pain,R.H.(1995): Elderly women and violent crime: the least likely victim? *British Journal of Criminology*, 35-4, 584-98.
- Pain,R.H.(forthcoming): Old age and ageism in urban research: the case of fear of crime. *International Journal of Urban and Regional Research*.
- Painter,K.(1991): *Wife rape and the law*. University of Manchester Press, Manchester.
- Painter,K.(1992): Different worlds: the spatial, temporal and social dimensions of female victimisation. In Evans,D.J., Fyfe,N.R. and Herbert,D.T.(eds.) *Crime, policing and place: essays in environmental criminology*. Routledge, London 164-95.
- Pawson,E. and Banks,G.(1993): Rape and fear in a New Zealand city: *Area*, 25-1, 55-63.
- Pratt,G. and Hanson,S.(1988): Gender, class and space. *Environment and Planning D: Society and Space*, 6, 15-35.
- Segal,L.(1990): *Slow motion: changing masculinities, changing men*. Virago, London.
- Smith,S.J.(1986): *Crime, space and society*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Smith,S.J.(1987): Design against crime? Beyond the rhetoric of residential crime prevention. *Property Management*. 5-2, 146-50.
- Smith,S.J.(1989): Social relations, neighbourhood structure, and the fear of crime in Britain. In Evans,D. and Herbert,D.(eds.) *The geography of crime*. Routledge, London, 193-227.
- Sparks,R(1992): Reason and unreason in 'left realism': some problems in the constitution of the fear of crime. In Matthews,R. and Young,J.(eds.) *Issues in realist criminology*. Sage, London, 119-35.
- Stanko,E.A.(1987): Typical violence, normal precaution: men, women and interpersonal violence in England, Wales, Scotland the USA. In Hanmer,J. and Maynard,M.(eds.) *Women, violence and social control*. Macmillan, London, 122-34.
- Stanko,E.A.(1988): Fear of crime the myth of the safe home: a feminist critique of criminology. In Yllo,K. and Bograd,M.(eds.)

- Feminist perspectives on wife abuse*. Sage, London, 75-89.
- Stanko, E. 1990a: Everyday violence: how women and men experience sexual and physical danger. Pandora, London.
- Stanko, E. (1990b): When precaution is normal: a feminist critique of crime prevention in Gelsthorpe, L. and Morris, A. (eds.) *Feminist perspectives in criminology*. Open University Press, Milton Keynes, 173-83.
- Stanko, E.A. and Hobdell, K. (1993): Assault on men: masculinity and male victimisation. *British Journal of Criminology*, 33-3, 400-15.
- Stollard, P. (1991): *Crime prevention through housing design*. Chapman and Hall, London.
- Trench, S. Oc. T. and Tiesdell, S. (1992): Safer cities for women: perceived risks and planning measures. *Town Planning Review*, 63-2, 265-78.
- Valentine, G. (1989): *Women's fear of male violence in public space: a spatial expression of patriarchy*. Unpubl. PhD thesis, Department of Geography, University of Reading.
- Valentine, G. (1991): Women's fear and the design of public space. *Built Environment*, 18-4, 288-303.
- Valentine, G. 1992: Images of danger: women's sources of information about the spatial distribution of male violence. *Area* 24-1, 22-9.
- Van der Wurff, A. and Stringer, P. (1988): Locations of fear. In Sime, J. D. (ed) *Safety in the built environment*. Spon, Portsmouth, 297-308.
- Walklate, S. (1989): *Victimology*. Unwin Hyman, London.
- Warr, M. (1984): Fear of victimization: why are women and the elderly more afraid? *Social Science Quarterly*, 65, 691-702.
- Warr, M. (1990): Dangerous situations: social context and fear of victimisation. *Social Forces*, 68-3, 891-907.
- Webster, C. (1994): *Youth crime, victimisation and racial harassment: the Keighley*. Crime Survey Centre for Research in Applied Community Studies, Bradford and Ilkley Community College, Bradford.
- Women's Design Service (1988): *Women's safety on housing estates*. Author, London.
- Young, J. (1988): Risk of crime and fear of crime: a realist critique of survey-based assumptions. In Maguire, M. and Pointing, J. (eds.) *Victims of crime: a new deal?* Open University Press, Milton Keynes, 164-76.

第1表 性的暴力への恐怖による女性の行動やライフスタイルへの影響

性的暴力への恐怖から「常に」あるいは「時々」次のことを行う	全体 (割合) (n=389)	SC1	SC2	SC3	SC4 <sup>a</sup>	P <sup>b</sup>
外出しない	8.9	11.3	7.6	4.7	7.1	ns
一人で外出しない	35.0	39.6	29.5	37.2	32.1	ns
玄関に応答しない	35.7	42.3	35.9	26.7	46.4	ns
定期的な訪問をしない	10.8	9.8	11.8	8.3	3.6	ns
歩行中は用心する	84.6	82.7	86.9	81.4	85.7	ns
特定の道/地域を避ける	83.8	76.9	84.9	84.9	89.3	ns
特定の交通機関を避ける	70.7	63.9	71.0	74.2	83.9	ns
特定の交通機関を選ぶ	84.8	75.4	85.2	90.3	96.8	<0.05
性的攻撃への恐怖						
社会生活への影響	76.9	63.9	81.5	82.8	80.6	ns
余暇活動への影響	53.6	62.3	65.4	61.3	77.4	ns
労働生活への影響	41.6	52.5	39.5	40.9	41.3	ns

注:a: SC4は最も高い社会階層、SC1は最も低い社会階層である。社会階層の別の数値は、階層を決定することのできた89.3%のサンプル(n=347)に基づいている。b: 観測度数をカイ二乗検定を用いて期待度数と比較した。平均の差が95%の信頼水準で有意な場合、pの値が示されている。(ns=有意でない)。

第2表 公的・私的空間の中で女性が抱く暴力的犯罪への恐怖

それぞれの事件について「とても心配である」 あるいは「かなり心配である」	割合 (n=380)
非面識者による屋外での性的暴行	68.7
非面識者による屋外での身体的暴行	59.0
非面識者による家の中での性的暴行	45.2
非面識者による家の中での身体的暴行	42.0
面識者による家の中での身体的暴行	23.4
面識者による家の中での性的暴行	25.2

第3表 レイプについての女性の認識

加害者としてもっとも考えられる人 (一般的な場合)	割合 (n=386)	加害者としてもっとも考えられる人 (もし自分が犠牲者となる場合)	割合 (n=386)
親戚	4.2	親戚	2.1
友人／知人	39.2	友人／知人	8.5
非面識者	47.3	非面識者	70.2
わからない	9.4	思い浮かばない	19.2

第4表 性的嫌がらせによって女性が抱く性的攻撃への恐怖への影響

出来事	a	b
	少なくとも一つの出来事に 遭った回答者の割合	出来事によって性的攻撃 を心配した回答者の割合
付きまとわれた	49.8	85.1
ちらっと見られた	33.5	49.8
卑わいな電話を掛けられた	55.2	49.6
触られた	38.3	42.5
嫌らしい目つきで見られた	64.8	22.0
必要のない性的なことを言われた	76.4	20.8
口笛を吹かれた	89.5	3.1

第5表 公的・私的空間の中で異なる社会階層の女性が抱く暴力への恐怖

それぞれの出来事について「とても心配である」あるいは「かなり心配である」(n=347)	SC1	SC2	SC3	SC4 <sup>a</sup>	p <sup>b</sup>
非面識者による屋外での性的暴行	69.5	68.1	68.8	64.5	ns
非面識者による屋外での身体的暴行	66.1	56.9	55.9	51.6	ns
面識者による家の中での性的暴行	36.7	26.7	17.2	9.7	<0.01
面識者による家の中での身体的暴行	36.8	23.6	16.1	6.5	<0.01

注: a: SC4は最も高い社会階層、SC1は最も低い社会階層である。社会階層別の数値は、階層を決定できた標本893分のサンプル(n=347)に基づいている。b: 観測度数をカイニ乗検定を用いて期待度数と比較した。平均の差が95%の信頼水準で有意な場合、pの値が示されている(ns=有意でない)。

第6表 公的・私的空間の中で女性が抱く恐怖についての年齢階層別比較

それぞれの出来事について「とても心配である」 あるいは「かなり心配である」(n=347)	年齢集団				p <sup>a</sup>
	18-30 (n=136)	31-45 (n=115)	46-60 (n=93)	60+ (n=47)	
非面識者による屋外での性的暴行	83.2	71.9	53.5	39.2	>0.01
非面識者による屋外での身体的暴行	65.1	63.8	48.0	44.4	<0.01
面識者による家の中での性的暴行	28.0	28.0	18.4	21.7	ns
面識者による家の中での身体的暴行	23.7	29.5	18.2	20.1	ns

注:a: 観測度数をカイ二乗検定を用いて期待度数と比較した。平均の差が95%の信頼水準で有意な場合、pの値が示されている(ns=有意でない)。

第7表 身体的障害のある女性とない女性が抱く性的攻撃への恐怖による影響

性的暴力への恐怖から「常に」あるいは次のことを行なう	身体的障害を持つ 回答者の割合 <sup>a</sup> (n=33)	身体的障害のない 回答者の割合 (n=356)	p <sup>b</sup>
玄関に応答しない	45.5	35	Ns
定期的な訪問をしない	23.8	10.6	Ns
非面識者に危険を感じる	59.1	61.8	Ns
面識者に危険を感じる	18.2	4.8	<0.01
外出しない	27.3	8.3	<0.01
一人で外出しない	59.1	33.7	<0.01

注:a: SC4は最も高い社会階層、SC1は最も低い社会階層である。社会階層の合計値は、階層を決定することのできた標本89.3% (n=347) に基づいている。

b: 観測度数をChi二乗検定を用いて推定度数と比較した。差の範囲は、計算されたp値の95%の信頼水準で有意である(ns=有意でない)。

第8表 あなたの子どもが性的暴行・虐待の犠牲になることに、どれだけ心配していますか？

	女兒への心配 (割合) (n=195 <sup>a</sup> )	男児への心配 (割合) (n=195)
いつも	11.1	6.9
よく	19.3	11.9
ときどき	30.4	31.4
たまに	19.3	25.2
心配しない	19.9	24.5

注:a: 195人の回答者は、現在16歳以下の子どもがいるか、かつて子どもがいた人である

### 解題（吉田容子）

男性の暴力に関する問題は、つねにフェミニストの関心事の一つであった。暴力そのもの、また暴力への恐怖によって家父長制的な権力が表され、維持されてきた。男性から暴力を受けるのではないかという恐怖が女性の日常生活を支配し、女性を従属させ続けているとフェミニストは認識する。男性の暴力から女性を守ろうとする具体的な試みが女性解放運動のなかで重要視されたにもかかわらず、地理学の分野で暴力や犯罪の問題が本格的に扱われるようになるのは、1980年代に入ってからである。

現在、英国ノーサンブリア大学に勤務する R.H.ペインは、エディンバラ大学の S.スミスの指導のもとで、Ph.D.論文「犯罪・社会統制・空間の制約——性的暴力に対する女性の恐怖を事例として——」を1993年に提出した若手のフェミニスト地理学者である。1991年の『*Progress in Human Geography*』に、Ph.D.論文の草稿となったと思われる「空間・性的暴力・社会統制-犯罪に対する女性の恐怖についての地理的分析とフェミニスト分析の統合-」が掲載されたのを皮切りに、ほぼ毎年、女性の恐怖を課題とする論文を発表している。短期間での势力的な研究活動には圧倒されるものがあるが、わが国で彼女の業績を知る地理学者はほとんどいないだろう。さらに、1999年出版の『人文地理学のフェミニスト用語辞典』では、虐待・犯罪への恐怖・性的嫌がらせ・非面識者の危険・暴力などの項目をペインが解説しており、女性の恐怖に関する研究では第一人者と言ってもよからう。

本論文の目的は、定量的かつ定質的手法を用いて、暴力的犯罪の体験やそれへの恐怖の反応が女性の属性によっていかに決定づけられるのかを示すことであるが、特に定量的手法については多くの問題があるようだ。実施のアンケート結果から、女性が恐怖を感じる相手と場所を導き出そうと試みているが、その多くは単純なパーセンテージの算出作業であるため、女性を恐怖へと駆り立てるいくつかの要因について、それら相互の関係が見えてこないのである。また、女性の属性（社会階層・年齢・障害の有無など）の違いに注目した点は評価できるものの、各属性について指標の粗さは否めない。さらに、限定されたアンケート項目に対する回答から、個人によって感じ方の程度が異なる

恐怖を定量的に把握してよいものか疑問である。

定量的把握から生じた問題点に対応するため、一方で定質的手法も採用している。アンケート調査の際に了承を得た女性へのインタビューから、女性が公的・私的空間のなかで抱く犯罪や暴力への恐怖を引き出すために、語りを多用している。このように語りを軸にして議論を進展させていく手法は、近年のフェミニスト地理学者の間で好んで用いられる傾向にある。たとえば、『空間・社会・地理思想』第3号で紹介された「(異)性愛化した空間」の筆者 G.バレンタインは、レズビアンへの対話を通してコミュニティや日常空間を問い直すような研究態度をとっている。また彼女は、英国レディングを事例に、公的空間のなかで女性が男性から受ける暴力に関する研究で Ph.D.論文(1989)を提出しており、さらに一連の研究成果を学術雑誌に発表している(1991, 1992)。これらの発表された研究論文の中にも、女性の語りを軸にして議論を進める手法が用いられている。したがって、ペインもバレンタインの影響を少なからず受けているものと推測できよう。

女性の恐怖に関する初期の研究では、日常生活のなかで女性が恐怖を感じるもっとも大きな要因を、女性が身体的に脆弱であることと理解していたが、ペインは、社会的・経済的に不平等であることも、身体的な脆弱性と同様に重要な要因であると主張した。また、80年代後半までの研究は、公的空間のなかで女性がいかなる暴力や犯罪に曝され、そしてそれらへの恐怖がいかに女性の日常生活を制約しているかを明らかにした。しかし、これらの研究では、女性は公的空間のなかで非面識者からもっとも暴力や犯罪の被害を受けやすいという前提に依拠していたため、私的空間は研究の対象から外されていた。これに対してペインは、女性が公的空間を危険な場所として、私的空間を安全な場所として認識してきたことは、‘spatial paradox’であると指摘し、私的空間すなわち家庭こそが、女性がかつても被害を受けやすい場所であることを実証しようとしたのである。さらに、女性に加えて、子ども・高齢者・身体障害者をと公的・私的空間のなかで彼(女)たちの身に起こる危険や暴力の問題について、それを生み出す権力構造の解明をめざしている(1997)。

女性が、夫や恋人など親しい男性から受ける暴力

domestic violence (DV) の実態が、わが国でも行政などの調査によって少しずつ明らかになってきた。東京都が 1998 年 7 月から 8 月にかけて都民 2,819 人に行った調査では、パートナーのいる女性の約 6 割がなんらかの暴力を受けたと回答している。加えて、同年 11 月に実施した DV 被害者女性 52 人の面接調査では、子どもがいる場合 6 割以上が子どもも同時に被害を受けていることが明らかになった。このように、わが国においても私的空間での暴力が深刻な問題に発展してきており、もはや放置できない段階にある。ペインの研究は、今後いっそう深刻化するこの社会問題に対し

て地理学がいかに貢献できるのか、その一つの方向性を明示するものである。

#### 参考文献

- McDowell, L. and Sharp, J.P. eds., (1999): *A Feminist Glossary of Human Geography*. Arnold, London.
- Pain, R.H. (1997): 'Old age' and ageism in urban research: the case of fear of crime. *International Journal of Urban and Regional Research*, 21-1.